

テニス・プレーヤーはなぜウインブルドンに 特別の思いを持つのか？

山田幸雄
体育科学系助教授

平成12年度の総合科目の中に、体育センターではスポーツその遺産—The great of sports—を開講した。開講の趣旨は、スポーツに関する様々な事柄の中で、後世に残ると思われるもの、あるいは後世に語り継ぐに値すると思われるものを紹介することであった。受講する学生は、スポーツに内在する奥の深さ、幅広さ、さらにスポーツを見る視点の多様さを学ぼうというものであった。

スポーツその遺産は、6編の大きなテーマが示され、各編は4回の講義と1回のフォーラムから構成される。英雄編、文芸・芸術編、イベント編、シドニーオリンピック編、サイエンス・テクノロジー編、聖地編である。私は、聖地編のST ANDREWS-HOME of GOLF、オリンピック—復興近代オリンピックの聖地—、国技館—相撲のシンボリズム—と共に行われたウインブルドン～テニスプレーヤーあこがれの地～を担当した。

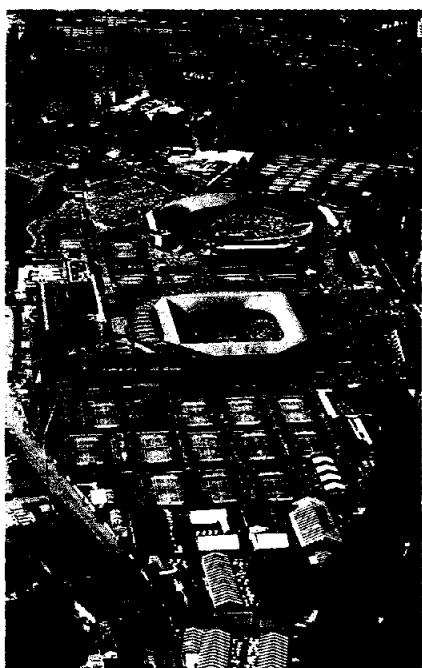
国際テニス連盟では、全英テニス選手権（ウインブルドン）、全仏テニス選手権（ローランギャロス）、全米テニス選手権、全豪テニス選手権をテニス界の4大トーナメントと位置づけ、他の大会とは区別し特別視している。そして、4大トーナメントは同格ということになっている。しかし、ウインブルドン大会に出場したプレーヤーは皆、口を揃えて、ウインブルドンだけは別格であるという。何が特別であるのか尋ねると、雰囲気であるとか、うーんと返答に困ってしまう場合がある。そこで、テニスプレーヤーがなぜウインブルドン大会にあこがれるのかについて考えてみるのが本論のテーマである。

1. 19世紀のイギリススポーツが果たした役割

イギリスは、産業革命を経てもなお、一貫してジェントルマンと呼ばれる少数



1891 テニスパーティ
(当時の上流社会の様子がよくわかる)



現在 ウィンブルドン全景



1927 ウィンブルドン全景
(センターコートより上方は空地になっている)

のエリート階級によって支配され、それが19世紀を通して維持されてきた。パブリック・スクールはジェントルマンの養成機関として支配体制の維持に貢献してきた。そして、スポーツはパブリック・スクールでエリート教育に取り込まれていく中で時代に適った精神性を与えられてきた。イギリスを発祥の地とするスポーツに今も強く息づいているフェアプレーの精神は、パブリック・スクールで培われたものである。

2. テニスの発展におけるイギリスの役割

① ボームとは？

フランスの修道院で行われたジュ・ド・ボーム (jeu de paume) がテニスの原型であるといわれている。ボームはクルトボームとロングボームの2つがあり、前者は有産市民階級が室内の専用コートで、後者は一般市民が公園や原っぱで行った。2つのボームの要素を重ね合わせてテニスが生まれたといわれている。イギリスでは、ボームのことをリアルテニスと呼び、有産市民階級の人々に愛され親しまれた。

② ローンテニスの形成過程、誕生

1870年、ウインブルドン大会の主催者となるオールイングランド・クロッケークラブが誕生し、「フィールド」誌編集

長ウオルシュがクラブの名誉会長になった。雑誌の編集長が名誉会長になったことは、テニスとマスコミがタイアップして共に発展する先駆けになったと考えられる。

ボールは、それまでゴムの塊であったものが中空のゴムボールにフランネルの布を被せたボールが開発された。それを用いたテニスは有産市民階級の間に絶大な人気を得た。有産市民階級の人々は、熱心にプレーし、クラブを組織し、自宅にテニスコートを設け、テニスパーティを開いたりした。

そこで、テニスの共通ルールが必要になり、テニスのルール制定委員会が設けられ、1877年にテニスの競技用ルールがまとめられた。この年、オールイングランド・クロッケークラブ主催の第1回ウインブルドン大会が開催された。ウインブルドン大会を開催するために、共通ルールが必要になったともいわれている。テニスのルール制定には、当時のリアルテニスのトッププレーヤー達が関わったので、テニスのルールはリアルテニスの影響を強く受けた。

③ 近代化へのステップ

ウインブルドン大会の開催を契機として、ルールの統一が抵抗なく進められた。中空ボールをいち早く採用したテニ

スは、国際化への道を一直線に進むことになった。中空ボールは、技術の習得を容易にし、これが技術の発展につながり、ひいてはテニスの大衆化に結び付いた。また、テニス大会はクラブと雑誌社がタイアップして利潤を求めようとする事業として捉えられるようになった。

④オープン化

イギリステニス協会は、1967年12月の年次総会でプロを受け入れるという歴史的動議を通した。国際テニス連盟（ITF）は1968年のバリ総会で、イギリステニス協会に追従するような形でアマチュアリズムについてのルール作りと18才以上のプレーヤーの賞金の受け取りを認めることになった。

3. 国際テニス連盟におけるイギリスの力

国際テニス連盟は、1912年にヨーロッパを中心に結成された。それ以前は、イギリステニス協会イコール国際テニス連盟であった。イギリステニス協会は、ウインブルドンでテニスの世界選手権と位置づけてきた。それに対し、アメリカは強い不満を持ち国際テニス連盟に参加しなかった。アメリカが参加しないため、インターナショナルな力は持ち得なかった。

1926年、国際テニス連盟はウインブル

ドンで世界選手権とみなす方針を取り止め、4大トーナメントは同格としたことで、アメリカも納得し加盟した。

4. 今も残るウインブルドンの伝統 格式

ウインブルドンは、第1回大会から現在まで芝のコートで大会が開催されている。全米テニス選手権や全豪テニス選手権は、1970年頃までは芝のコートで開催されてきたが、芝の維持管理の煩雑さ、手入れの簡単なコートの出現によりハードコートに変更された。

また、ウインブルドンのセンターコートは、大会期間中の2週間しか使用されず、オープニングマッチは、前年度男子シングルス優勝者のシングルス1回戦と決まっている。

さらに、ウインブルドンの大会会長はイギリスの王族であるが、主催はThe All England Lawn Tennis and Croquet Clubという民間のクラブである。

5. まとめ

テニスプレーヤーがウインブルドンに特別の思いを持つ理由として、大きく2つのことが考えられる。

一つは、テニス発祥の地イギリスだけが持つテニスに対する歴史的重みである。

①イギリスで始まったスポーツは、ジェントルマンの教育に大きく貢献してきた。

②イギリステニス協会イコール国際テニス連盟であった時代が長く、その間はウィンブルドン大会を世界選手権とみなしてきた。

③テニスはイギリスで始まり、イギリスで大きく育ち、イギリスはテニスの発展に大きく貢献してきた。

ふたつめは、ウィンブルドン大会を主催する The All England Lawn Tennis and Croquet Club というクラブの努力が挙げられる。

④大会は、イギリスの伝統と格式を守りながらも、マスコミ等とのタイアップによりテニスの大衆化、商業化、事業化に上手く結びつけ発展している。

(やまだゆきお テニス方法論)

